



「今どきの言葉」図鑑 ②

京都教育大学教授

もりやま

森山 卓郎

たくらう

きもい



「きもい」とは、「気持ち悪い」からできた形容詞。「気色悪い」からできた「きしよい」もよく似た言葉だ。嫌悪感を表す。例えば腐った食べ物のようなものに対して使うこともあるが、人に対して使われることもある。その場合は人を傷つける言葉だ。

文法的には、最初の二つの音をとって、あとに「い」をつけた形である（一般に音二つはまとまりがいい）。ただ、形容詞としての形になってはいるが、「きもくて」「きもければ」などの形はあまり言わないようだ（方言差もあるが）。終止・連体形や語幹用法が中心で、それ以外には一部連用形系統の用法くらいしかないような気がする。「きも+さ」「きも+み」なんていう名詞化表現もあまり聞かない。新し

い言葉である上に、文体的に低いから、用法が限られるのだろう。

同じような形に、「うざい」（↑「うざつたい」）、「むずい」（↑「むずかしい」）、「はずい」（↑「はずかしい」）、「ケバい」（↑「けばかしい」）、「ムサイ」（↑「むさくるしい」）、「うつとい」（↑「うつとうしい」）などがある。いずれも形容詞を縮約した形だ。これらの「〇〇い」という縮約型形容詞にはマイナス評価のものが多そうだ。例えば「すばらしい」を「すばい」などと使う例は見聞きしないが、どうだろう。

このように形容詞を短く省略することで、感嘆的に使えて印象にも残りやすい。仲間内の言葉という意識もできる。マイナスの言葉ほどそうした意識が働くのかもしれない。「きもい」はその代表選手という気がする。

最近、「きもい」が、新たに感動詞化した用法も出てきているようだ。例えば、うっかり椅子を倒してしまった時などに「きも！」と言うような使い方だ。意にそわないこと、失敗があったときなどに、「きもい」の語幹を感嘆的に言うのである。「気持ち悪い」に相当する意味はほとんどない。「もう！」にも近い。

百年後、「きもい」はどうなっている？